繪本豐臣勲功記

八編

七

へ13
2209
77

門へ遠13 特
號 2209
巻 77

繪本豐臣勲功記八編巻之七

目録

破制吉川元長大陽敵謀　附 有地戦死
元長難戦を陪んで射術能敵を禦ぐ図
清正雲勇救吉川小早川　附 信釈赴潰岐
有地左近奮激戦死の図

清正設謀計惱金子叙忠　附黒田渡海
後藤基次暴風雨を乘じて渡海の図
黒田入讃州之陷吉岡城　附諸所落城

豊臣記八編卷之七

豊臣記八編卷之七

東京　櫻澤堂山　刪補

破制吉川元長大隈欵謀　属有地戰死

韓愈平生に奇を好む兼山の孤峯に登りて。返る縛を侍ざりしといふ。豈韓愈社をからんや。形好よ醜るも社を愈然り。愚なくんぞあるべからざる。今吉川元長も。自己の勇に恥ずばゆゆしに。欵の設籌よ隈るおと形好より起る愚なんぬ。然かどに吉川治部少輔元長ハ。夜陸るまでに欵陣を。苦もなく三箇所破り。猛も進んで勢威猛く。吉良攝磨守の陣所よ。高山のおとく突蒐らんとす。有斯至斯に小早川隆景。跟を暮ふて退来り。吉川よ弟面なし。

異論〻〻道理と従著て。欵の欺計に陷らざるうち。退陣あれと。進めしこのども。元長些も听容ず。足下の令社をみらば。陳代清正の軍令に背き。合戦此期に到ること。真罪を問ども。除かりなれども。将外に立ときハ。君命も亦奉ざ法理あり。吾も亦一方乃大将として。然も堅べき正と看ながら。捨て迂く正道あらんや。況今バ欵り籌策あり。と。庶量の率かハせん。然まで元長と情得る。足下も跟を補助らきて。咱過失を赦をせ玉へ。何除長治〻とあらんと。平日に驕て暴〻しく。聆容ごふもあらざれバ。隆景も今ハ是非なしと。急使を発て清正へ。これらの詞を注伸る〻。元長と偕に率来りし。三千餘騎を探出す。松山城なる清正も。遠注伸にうち驚き。是一大事の合戦なり。弁置れしと。法士小指揮なし。松山乃城と奮発す。偖も吉川元長ハ。隆景が後逼にもすし。殘喜し。両勢走万三千餘騎。扶原弥八郎を先陣として。吉良ご陣正面も觸らず。勃然として殺投し。百方小搦立方面に別れハ。吉良勢些も怯りはず。北走南奪東馳西倒。驚に逼る羅兎乃ごく。一遍もせで散乱せり。這時金子偕之湯ハ。十分に欵を勾引進。甘柿の嶺ゑ攀磨り。欵の暴らを看守り在けるが。時分ハよしと大旗を麾〻〻と揮揺し。自方ハ時号を做けるかごこそ。久武内蔵助吉良援磨ら二千餘人を一隊ゑ合せ。羽り激する大波の。汐石を巻撃怒勢を発し。執て迫く

吉川勢に。猪先と突て蒐る。金子落び嶺上より。晴号乃一炮を雷すと等しく。篁中林間野畔谷底出と嘩とる銃の音ハ。幾百万とも量られず。西乃方より桑名監物三千餘騎て突発すきバ。東の方より石谷兵部。これもおれじく三千餘騎。南の方ハ吉良。久武ゞ。跟を扶て金子伯耆守。熊谷四郎左衛門を正魁り進め。三千餘騎を蛇行ふ推て。甘柿嶺を弛下る。偖亦大将信親ハ。本部の勢五千餘騎。北乃方より雷沸なす。まつさ巽乃方より。桑名孫次郎五百餘騎。乾乃方より南岡九郎。これも仝じく五百餘騎。坤より吉田弥左衛門五百餘騎。艮より中内源兵衛五百餘騎。八幾の軍勢部合せて一万八千餘人須弥も崩き

蒼海も涌出すはこのと怪しむぞり。山野林谷を裏せて。接起ふく発起。吉川勢と小早川ゞ。中を絶なく推破り。鑿にせんと攻寄くきゞ。勇猛無双の吉川勢も。途を失ふて遺こに。東の山際へ推逼らまとり。亦小早川乃三千餘騎ハ。廣野の中に巻逼られ。東西に帝り。南北に蒐。乾坤艮巽乃突揉り。方僅ハ弛態弛余ぞと。黒くなり赤くなり。火炙こ化て血戦す。中も吉川元長ゞ。嘗日の戦猛麗に。六分割の金小板を。撚糸もりて縅せ。猛乃。埜像拝たる台盛。七寸ほ剰る駒の馬乃ハ。蹴鞠安てうち跨り。桝地切府の蕪箭を。廿四挿てを近ふ揉倚。南蛮錦まて九節を。粧具巻せ。猛牙爰の。弓乃。弭を掌て振逼。岬乃義

吉川元長夜毆頽の難戰ふ激射して一陣の敵を追却くる圖

る老松の。下に歸を踏固めさせ。五人張る十三束。射付箭を
も。忘るゝむこのりに引隙り。挿逼引遍散々に射起るに。進
来れる敵兵を。速地る十九騎射て落す。大祇ぐのゝめに石谷
が隊伍。陳々起て看えり。元長得とり。馬を跳らせ太刀
驚甲に當驚し。石谷兵部が隊中へ。旋風起て破て拔り。三千
むりの自方を懸し。追つ逐つ破起雛伏羊く一方を斬破
れば。息をも次せず久武が。一千餘騎を推捉稠。餘まし
こ揉起る。元長獅子の憤怒を発し。眼を逆瞋雷喝して。正中
を割て薙廻れば。集藪離合の敵兵輩。眼撲微塵に斬殺
き。有係る陽き戦場も。韓紅り浚成ぎのり。死憤を殺して
戦へぞ。隊伍厳しき久武勢を。左右へ颯と斬冥き。堆む

丘に跑巻て。自方の兵を纂ふるに。一万餘人も九分八軽れ。
て。五百ばかりを殺りける。一息次で南方の。山北半腹を看
る行ば。拔原季重大軍に捕捆らきて乱敵崩戦。祝り危き態
なりけるゆ石渠を段すな助けよと。大霹靂鬼を火雷に駕
きて。虎嶽を震殺るゴ像く。桑名孫次兵衛が背後より。大
地を動し搦入て。粗なく一方を撃破り。孫八郎小稍をづき。
元長大弦まで来りつるぞ。撼めや季重這隊を破き。敵を大
半疲まり。撃よ搦よと呼れば大ゴ力を切る。敵
を八方十面り敲蔵して圍を出。元長と一隊なり。虎を猛り
弦と暴き。虚空を瞋ますに血煙り。瞳くとして雲赤く。郊原
弦巻太刀者に。泓として風腥し。金鱗殘毛死り。天地を

今や斃るゝかと怪だこのりの烈戦ゝ。桑名ゞの軍兵堪りなず。千走万奔され先ると。迫く敵乃横路より。吏代て進侍吉良横広守ゞ一手作猪。突然として棚て蒐営日を未ゝ辺々を。疲果たる吉川元長。太や戦弛と覚ゆなし。拡原弥八郎と顧て。このゞ事重ゝき誤ゝ。清正ゞの制禁を破り。浩ゞ策罠に陥ゝき。自然のゝゝ小早川までと怪しゝたゝ事。面目なき始末なり。方僅ハたやゝ従生に。戦死の外あるべからば。徒怯て後乃嗤と嘗ゝな。先や這儀と撃破り。今生乃遺懐ゝと。信親と牽揚ゞ。刺番へんゝ場ことあらゞと。瞋る眼ゝ血と灌き。進来敵と睨逼ながら。焔乃如き息吹殺せゞ。拡原重泪と涙ゞ。吾ゝそゝ地ゞ諫を破り。君ゝ悪戦と勧めゝふせ。大罪五逆ゝ労るべけきゞ。君と後ゝきまおらす法。逆と冥て戦死なきん。大持乃御身と徒に。浩ゝ時治乃國ゝして。棄させ玉ふそもつたいなし。かれらば短慮とゝしゝ事ゝな。浩ゞ目前の敵と破て御跡開城ばこのまつらんと。陣場ゝ生ゝる拾至の活路と。勃発ゝ撃抜進侍ゝる。正斜の敵と廿騎ばこゝり。横ゝ擲ハ人風飛ゝ抑ゞゞ猛猪。敵流ゝゝと振廻す。活路ゝ路ゝ蹴ゝられて。盧紅と褒ぜーハ。対ゝられくに秋風の面ゝたまらぬ木の葉哉。ぬくにてゝ迎撃され。這駒業信親ゞ。吉川勢の暴ゝと覆て。暴徒の兵と率陣へ。這方と労ゝ孔向。元長目速く眦と裂ゝ。堅む敵将御系なれと。備列と車

輪り搦苞り。元長信親互り弛をり危やと者る際に両大将。太刀と太刀とを斬拔び。石火五月蠅進虚退開合出没縱横渇し。驟もせば戰ひ々ば。信親ハ敵と倘きて。殃棄まする凛たるに。元長も自兵をおほひり撃れて。雰氣を折け猛勢も。也なんとすば赤骨労筋。弱危く者えけるゆ名。扨原拳重蹊と弛出し。君に代て一戦なさん。御免ぞふと活木を抛弃二間揉の繞と撲際より。劈面目的て搦出に。毬先ハすこ一り々んども。信親ハ肩岩と五六分掠て。蛇尾の盛を仰相り。後へ落さきる得の位取。鶯とーつゝも猿拂去馬を逐ーて逃出に。吁遁すなと元長。要重。馬を並べて追蒐かを。其ハ大将の御大事と。乗名久武吉自。石谷取て逐ーて

吉川を。落び正中へ拔罩む。東西しくーやと松原ご。互君弛御逐闘かんずと。嗅ゝ蒋び暴起れぞ。鞠乃狂威に畏たりけん。右横左横り乱走ーれまぞ。幸くも元長を技得て。危急乃圍を遁出。自方乃兵士を顔るに。最先五百騎ばのりなりーも。今ハ元長季重倩。互従ーげの十八騎となりけるが。十町ばかり退去て。谷際弛小溪り馬を騎入。小要時息を吹嘘主さり。大将お祇り おゝすと者るより。撃弛さ祇たる吉川勢。百騎ばかり弛集り。元長乃無事を悦びゝゆ名。互従銳氣を愁さ祇々ば。然ゝても小早川隆景ハ。存亡いこのにと一方を視るり。歇う自方ゝ。を に 縣の夢 弛と 聆えて。程合戦弛あば態なるゆ名。定て 隆景なんぬべー。扶けずんぞあ

るべからぬと。若び引く返ゝさり。茲に亦吉川の勇士有地左近長友なり。這遭乃合戦理ならぬと。主君を志ばし諫めりまども。元長更り聆容ずして。這敗軍に迫びけるゆゑ。弛き戦ひせしかど。沙汰せられてハ抒憾しと。將暑の戦なし。既り元長を返去して后。頻る戦死を覚悟せし身乃。今ハさや心享しと。引て返して逐来る敵り。面も箱らで突拉す。有地の芳麗の打拵を。瞳細り着てゆれど黄点ともりく。魚鱗形を織したる鯉丸といふ大鎧り。美招乃浹具捫く拊。朱塗乃頭形の筋兜を逆面懸る眉際に被成。白地ゑ墨画の包袱を。手自描さる嘗慓背捕ゑ。七寸に餘る鳥驕ふ。朱鞘を安くうち跨り。三尺二寸乃順刀を。乱電乃像く閲こうし。山とも動ごす大音鈴。咱ハ吉川家乃忠臣と呼きたる。有地左近長友なり。君今日の合戦り敵社敵謀乃砲を受け。其呂として生を貪り。活長ふる不得なし。忠義の武士社戦死を。目前ゑ視て。汝倩ご。亀鑑ませよといふがと。大ろ石き。隨巻欵中へ驀地り弛拔。向ふ輩々驍甲眉屈。逃活兵を呈簡合勝。背弟千檀二三乃板。嘗ゑを活さりと羅伏軟起。万面り嘗て戦ふ威風ふ。さ引ごのら背負當慓社。画絶を動出るゴ偏く。人間とを更り見えざりけ。信親ハ大社まで。瘢を補ひ在さりしご。有地ご掙の強ふして。自方蹉り なるを着るより。意に岡くやむもなれ々ん。盛を脱で鬣な し。風と生じて弧朱さるを。左近ハ着てやり。吁森ぜし大将

ならずバ。金子面り拳揮で。陸羅道中乃同伴り。なきまく
おゆふ念力達し。信親あゝへ来るこそ。奔思乃海足すかも。
大将御条と軟て蒐るを。近士五六騎遮へけれども。死憤乃
長友一翻の。太刀孔刃風よたへ一騎右へ二騎まで斬て落
し。三掘目乃太刀を信親の。髯面目掌て撃さんとす。其を八
遅く。二人の尾従ご。速くを有地の騎さる馬の。前足剤此と
薙仆せど。馬八蹶折趾るゝと。信親驟さば撃太刀小。甲哀ゞ
地左をご首を。剤此と斬て落すとおもへど。念力尖ごく左
近ご首。飛来て信親ご。胸板り嚙着ハ。畏しかりける見
相なり。然ども信親胸當を。二重り窄く結さり巻るゆゑ。
歯ハ徹らずして羅ュけり。

清正震勇敵吉川小早川属信親趣讃

首を以て掘り觸るゝと。身を倒して檻を折くとゝ。共に奮
忠乃義士ュなん。有地左近も。渠ご左り出ずべからば。嗚
呼五十蔵侑ュ使ぶれぞ。いづまをも刈て告忠ュせん。を祇
ハ閑き小早川隆景ハ。吉川を救ゆんと。三千餘騎ュて援
逼しけるご。金子ごためュ捕捕らも。大に難危するとい
ども。了得ハ老切の大扨なれど。堆丘ュ陣伍を立。敵軍の兵
を駐ると着るよりも。金子ご先陣熊谷四郎左衛門勝直。
南乃方より馳寄ばバ。吉田孫左衛門。南岡九ゑ衛。中内源
兵衛。鉄こと推捉巻。籠鳥網魚を遁すると。篠節間と作
て攻着る。隆景速くも。八面り陣伍を構へ。弓鉄炮の陣防

をもつて。巻下に撃つ射つ。雹雨の如く防戦志々るゞ。矢流
れ全く盡けまゞ。小早川ゞ無雙の勇士。捷五郎左衛門古志
清右衛門。孫貢権内兵衛。野上宇右衛門。四方に揉て退却こゝ。
必死となりく拒抗せさり。然不どに吉川大江元長ハ。熱の
孝の陰ふる方を心的て孔朱りしゞ。此場隆景主従ゞ。雑
戦志て生るを着るより。疲れさをゞも百條の猛武者。突然と
志て猛憤烈怒し。吐炮のめく弛着。南岡。吉田ゞ協より。無二を
三り突て蒐る。金子清兵衛ハ。熱の孫を着て。南方の孫を然者ま
使セ山を捷て吉川ゞ。援孫より撃て蒐れゞ。信親も東方よ
り。孫伍を操出し逸提聞む。大祇ま洩て久武。楽名。ま也え
しと改着れれバ。元長。隆景今ハをや。戦死の外あるべうら

ずと。命数を決して血戦す。此時加藤主汁頭ハ小早川ゞ。臣
仲を陰と苦しく。三子條清を率淫へ松山の城を進発なし。二
里汗来るとこ清ま。熱の孝天地を振ふて。合戦正最中と象
へけれゞ。先や個く速げよ急げと。仮田。森本。井上。木村。赤星。福
を四陣り列孫。大将清正ハ。五陣ま次列て。百諸の悪鬼と呼
するが像く。千歳乃毒狂を罵るに苦しく。大将信親の本
部勢を。清路の方より軟崩す。金子親忠ハと着るより。旌
揮起て山崎り休息しけゞ楽名監物。石谷兵部ら六千條
騎を繰出ち世。加藤ゞ勢を喫止させんと。正黒になりて指
揮す皆ゞ。清正も亦怒孝を殺し。鬼をも欺むく加爰ゞ
孫り戦鈍き輩ありと。嗤たるを恥とハせずや。赤ま猛け

とを卸し。銑銑三尺幅五寸洸洸二尺五寸幅四寸氏渾捨の棣の二刃の素滌を。昇天龍の雲突ずくり。百振千奮と撃振こゝ。沸ぎぬき歓中へ。割て投り。左右に拗げハ五騎十騎。肚裂腸打首飛で。春風秋風吹混して。毛花蕊蕊の肉叢。血の雨なんど涙出るとゝ。怪むずこりに力戦志ゝ社ぞいこゝ方法稀成勇士かりとも。而を向べき大と仏らに。喝と頻て逃惑ふ。金子侍云情是ハ一大事。方催這一場ゝ逼て。隆景元長を斬ゑさんと欲する歓ゝ。清正ぎ大めゝ破らきなバ。千労して寸切を得る大と猛し。先や清正ぎ息の相止んと。弓ゝ筈揃て番へ引絞て弦吉活く。裁て放バ清正ぎ騎さる馬の鬣頭へ。筈深ゝ丁度射着とり。馬も駭き跳揚るを。清正鎌さず跳で卸り些も怯ます搦て西走。時ゝ石ぎ陣中より。荒井又左衛門と呼号。太く肥さる騎馬ゝ打跨り。激しく馳進り清正ゝ。搦て蒐るを木村又蔵。是も多双乃騎兵や。倖侍主人の猜易にせん。それ弓搦せといふより速く。荒井ぎ胴胜挙搏ゝ。右方の小腹ゝ掻絞で。左ゝにるの鐙ゝ摔り。清正の筋ゝ牽来る。拭含こうら欲兵十二三騎。捨洗そろへて返蒐る。又蔵これを頂て。汝侍荒井を救ゝんと。慕来るこそ陳情方き。返してくきんず受取と勇長奴丈撃揚て。曳と引寄し。歓中へ抛着らきて荒井この五体を。踏塵ゝ発でそ頻去ゝ多。這怪力ゝ懼怖。迫進輩ハ一個もなくて。右顔左倒ゝ逃散とり。木村ハ苦も方ふ馬を奪取。清正ゝ

敗軍を察徹て
有地左近長友
奮激の戰死ふ
猛怒を現し

あらせて。暮び奮激突戦しけれバ。味方より戦徹して。今日も晡乃中刻なれ。四国勢ハ疲果さるそれとこ後へ暴孫の清正ら搖起らま。孫ことして乱起を。はたりや鬱と搦伏斬伏。おゝを雪逢と戦ひけるゝぞ。隆景。元長をし処く佶たるを味なし。雪氣と懋まし欠て出れど位犯。親忠いまそ阮。恒をども仕と。自方の兵を。二孫ょ分て。操退ょなし。金子然谷後距しつゝも。一歩々戦ひ。二歩ハ退き。辛く徒兵を退揚けり。清正乃勇士達ハ。四国勢を飽まで悩まし。狂追撃をすべき暇なれど。天聰脅なりけるゆゑ。最已軍をたれまでなりと。吉川。小早川を赦不。凱歌響てひき退たり。彼て四国乃軍勢ハ。一里許り退きて。陣所を固し法構なし。清

て軍乃評議ら迫ぶ。佶るところへ微召なる。高松より馳ら来り。上方の進軍思田。浮田侑。大軍をもりて推流り。八方より攻起けるゆゑ。自方大ゝ敗軍せり。快ゝ南加勢場なるゞ〜と。書筯を投ゞて注伸しけもゞ。出将大ゝうち驚き。いゞすべ〜ゝ行りけるを。位犯出れゝ鬱ふて曰。味方這地の勇戦ら。隆景。元長をはゞ処と。清正をまゞ。悩まし〜たれゞ。這方の敵を壓拒場し。左ゝも大ゝ元高松を赦をずんハあるべ〜ゝらゞ。這方ハ金子を主将として。鞍乃法れを留置。我本邦の勢をもつて。高松乃陣の後逼をなさんと。評議を決して速地。然谷暗直を先陣となし。一方作法を率陽へ。微召営して進発しけり。備赤加藤清

正之。松山の堺の一里這方ゟ圍しく陣営の伐をなし。同じく軍議を潭じけるゝ。清正佶と一汁を工夫なし。友ゟ郷ふていふよう。我欲陣の蹊蹊を視るゝ。只く扶寨の搆を固ふし。唯防戦の准備をして戦発ずべき相者えず。撃べき器を設ざゝ。阿漢の軍剛ふして。信秋。親忠二ゟのうちいづれ一個這地を離れて。他へ加勢せしめ社ならん。今こそ速地ゟ撃べき時なり。各いこう懐すやらんと。稟すと元長聆も赦ず。清正の令験よく大地を攘進なり。乃子這遣軍令を達き不賞の軍に大敗して。清正の敝頑なかつせゞ。再遣佶て還られまじきと。再生の恩あゝ社ミならず。背制の罪をも紀しゐまぬ。沃表ハ海より狩你ゟり。只此上の軍恐ゟ。粉骨の一

戦こゝ頼をしけまと。決令て稟しけるゝ。清正大ゟ感賞し。吉川元長ゟまでゟ努激し玉ふゝ社ならバ。敵を破らんこと。手を翻す際なり。咱一計を設たり。好く如くに漂るべけまゞ。まづ隆景ハ西伊豫の大閤。宇和島芳を攻んゞた処ふ。軍勢を郝て向ゝ。謀計を泛漂すゝ。小早川も其議ゟ信ひ。自勢一万雄人を率し。西伊豫営て発向しけり

清正没謀計怪全子親忠属黒田渡海

尻ゟ百遣死穴ゟ陷まども。嘗て恐怖の心を生ぜゞ。独バ吉川元長ゟ驍雪の河ゟついて。清正蚤くも一汁を設け。まづ隆景を西伊豫へ赴こうせ。再び元長ゟ潤て曰く。咤り隆家

霧面ゟ西伊豫へ向ひけるバ金子傳兵衛大社を見て。吾倚ゞ陣小雲あらバ殺て出ん喜十分なるん。そこを謀て一計を施さんと。金子を恐さんこと容易うりあん。まづ松山の堀中へ人を遣し。加藤清兵衛と謀合せて。五十艘。徳居ゞ旗を拵せ。吾倚ゞ陣の後より。斬込ませ。那般こゝに料理べしと。汁器を伊洲に教え。当日ハ六月廿九日。未申の中分なるころ。使者をもいて惜く地へ。松山の堀へ当遣し。まつゝ意の利さる駅卒を金子ゞ陣へ向させつも。彼歓の陣近くなるころ。加藤ゞ駅卒を追蒐る相をなし。章篇森たる器をゞ。奪ちんと爭ふうち。逃来りし一個の駅卒ハ多蒙く章篇を涼谷へ抛込られハ。激流ゆゑ漂ふて。庵汁となく流

去けり。金子ゟ這相を看るよりも。あきれの使卒を欺ゝ揉すな。快く扶て陣屋ゝ牽けと。指揮ゝ強卒四五十人。走出て加藤ゞ駅卒を追散し。一個の駅卒走憑て欺通言を扶出し。金子ゞ陣屋に伸込り。詞繹いふふと鞠ぬきバ。咱ハ五十艘ゞ使友なるゞ。所寔の必く誤て加藤の番ゟ見屬らき。危く密書を奪ちれんとせしを。遁きぬとまろこ主人の書簡ハ涼谷渓へ投込だり。然るに主人五十艘奏の所伝ゞハ別義ゝにならず。昨日小ゟ川左衛門隆景西伊豫攻ゞ廻て加藤ハ僅三千ゝて。出張なし。吉川勢ハ廿一日の大敗軍ゝ十分撃きて。いまゞ藝召の加勢も来らず。堀中に残る加藤ゞ勢ハ。一計を以く麼にすなな

きバ。今日城中より撃て出ん。手号を迦さば清正を狙撃にし玉ふ告の意使なりと言すよ。金子鍛忠熟〻聆。過日社書籍もありけれぞ。謀とハ義よも悟らじ。自己ゞ議意よも愜ふてや。歓ぶ点と応りなく。使者を労ひ返して后。待ねよ明と謀合せ。其夜の暗号を待主さり。佐清正ハ明のどく謀徹し。其夜の戌を過る頃松山の悌内隆起。炬燭浅燒那星の像く。一時ょ悌を出ると著く吉川ゞ陣屋に火を放ち同士殴とこを殺しめさき。吉川。加茂慌忙相をなし上を下へと騒動しけるを。金子きよ遇るよりも。共ハ歓共を追窮し。食海中へ追入く魚腹ゞ葬りにさせんこと。唯此一挙に極まつたり。進めゝと正魁に一躍千里と馳来り

加藤ゞ陣に近づく時境。五十嵐。徳居侑の孝として。俺們をじ免ハ止点とを切ず。歓に降るといふといべども。活る時芋もたらんのと。恥を忍んで待主たり。加茂を撃捉き。吉川を剰をまゞと呼たりく。彩骨碎舟する態なるゆゑ。金子ハます〻猛起。加藤ゞ陣に涼こと突投。吉川ゞ陣ょ喫着ところを。嗜号と著え て後詰の方に。動と一炮乃響きけるゞ。忽然こして八方より。加茂勇士。木村。井上。仮田。森本を撃として。吾も我をと涌出なし。金子を撃捉き剰をなと。大地を動がし揺て蒐る。這時金子の先陣ハ。吉良播広当豊賓なりしゞ。加茂清兵衛これよありと。今まで自方の五十嵐と著せたる旗もみを歓なれバ。金子ハ憤然と讃

斷をなし。備ハ加藤ゞ欺の。策計ゝ陷されつるか。瞋懷なりと。跳跑す社ども。助くべき。自方も外にあらざれば。只戰死と覚悟なし。狂憤を殺して血戰なす。中ゝも吉良撈広ハ。加茂清左衛に斬起らき。党係の兵士も金撃盡さき。其外も幾口痍を負ひ。弱者の合戰面倒なりと。淺拋弃て清左清ゝ。攘著けるゞ両勇劣らず半時ばゝり。合づ囲き。扭合うちに。清左清膂力や起さりけん。遂に攘布活捉さり。これを提るより四國勢吉良を撃する扶けよと。廿騎ばゝり搦て跑ると吉良ゞ弃ゝる淺推綿。横叙拂ゝ拂着ゝ。猛進んゞ。食ゝと撃んと跑起る。ゝ社ゝ淺て木村。井上。鬼神天狗の暴るゞ如く。逼ゝ攘着るゝぞ。了得の金子も今

ハたや。いとゝ危ふく着えたる所へ。久武。桑名。石谷なんど。毘も同ゝく。殺戰して。斉茂主本。鵜平次小城下強庄林隼人赤星太郎左清倚ゞ大勢ゝ。西南の山際ゝ逐逼らき。千辛万苦の挙して。漸く一方を斬破り。這所ゝ来て大將金子を。令辛く助出し。陳なる一方を突敗り。九死一生乃途を遁れ。類ゝになりて退去けり。吉川加藤ゝ意の居ゝ。退陣す岱ゝと。二里ばゝり。蒔び膊川まで退逼けるゞ。昨夜夷の刻社初より。党日の午に至りけるゆゑ。自方の疲労もさぞあらんと。凱歌喇てぞ退取ける。其望日ハ加藤。吉川。膊川を打渉り。猿辻に推進て。或ゝ凍り或ハ力戰するだとに日ゝ勝ずといふことなく。七月の央までゝ。十遣の合戰七

遣まで勝利を得吉川加藤大に驍猛合戦を挑むといへど
も。金子備前守ハ決し恒をじ心を決し。猛退て八裂筵
といへる嶮岨に。要害結く法陣をし。嚴しく防戦しけるに
ぞ。攻がだく煮てけるを一應這條を吉川ハ守らせおき。
小早川が方に加せり。西伊豫を攻逼て。元親の本國土佐の
大濱へ推進んと。五千餘の兵を吉川ハ付屋し。後日
乃軍議を集合せ。淸正其身ハ八千餘騎にて。其夜密に
出馬なし。敵ハ知ざるを者一として西伊豫嘗して趣き
けり。そ社を器き。亦茲ハ。阿波州へ向てるゝ戻くを。深
田宰相義家乃陣代として。同七兵衛忠家。後前。英俊の勢
二万餘人次ハを黒田勘解由次官孝高を陣代と志て。扨

原七郎右衛門。小西弥九郎侑二万餘人。天正十三年四
月廿六日。室の津より推渉らんと。天氣を窺定めありけるが。
時境海上波暴く。渉るべふもならざきを。法ねいづまを平
天を待て。渡海すべしと評議を決して。陣所こゝを固めたり。
時に黒田ご良臣。後藤又兵衛本陣ハ来り。主人孝高に訊
ねけるゆう。今日乃御評議平天待と定りけるゝや。其ハ不
覚なる懐設なり。乃臣拙慮つゝのまゐるに。伊豫と阿波との
二ケ國を。這儀の勢より軍兵多く。殊ハ豫州の進軍ハ
加藤。吉川。小早川。既ハ彼國へ推渡り。伊豫東西を攻平げ。土
佐へ攻投ること速なるべし。自化共ハ強て。貪是四國の攻
軍なれば。淮ご乗取るとも悦しふハ決へども。怖くハ一番

に。敵を破て共國を乗取らんこそ本意なれ。且ハ天晴海
静なる日に渡らバ。敵も備心堅固なるべし。乃士熟こ親
定めけるに。今夜の天相夾刻陜よを。風波甚こ荒まるべし。
かならば這機を迎べきよと決まじ。快こ御准備ふるる
べし。然なごら我儀ぞうり沈拔なバ。自方不和の端なる
べけきバ。深田へ再應の潭交ましし。然して渡海大きにる
べし。渠倩ハ勿こ儀ふまじ。這虚よ渡波へ推渡らバ。俺們存
分の合戦して。敵の眠を覚させまをさん。勝利疑ひあ皆
べこらばと。堂に拔やうに稟しけるふぞ。大將不敵の考
高もを又て沈吟なし。いこのさま汝が料理の。從来一箇
も違ふ筆なし。先准備して渡るべしこ。再應深田へ評議

に迫ぶ。深田。小西倩大に驚き。勿こ回忘なかりけるゆゑ。
然バ吾倩ハ先渡して。運に任せて敵を破らん。風波の静な
ら日を待て。速き出航を願ふなりと。河を渡して車石小砦
り。硯り軍備調ひけきぞ。亜北小濱方へ推出す。孝高倶從の
門くにを。毋里太兵衛。栗山伝中。菅六之助。浦上庄太浦倩な
ど。時に後藤基次を。航方の面こを呼出し。只今出航火急
なり。先儀に勝さる廿五艘の。漢を好捉。縋を解。乗出すべ
しこ指揮しけれぞ。航夫輩怒傾なし。大磐石をも揺傾す。
こ青の暴風よ。波一且とも乗出さバ。瓦北よ航を微塵となな
らん。決て出航中無用なりと。怖きなごら。言発けれバ又兵
倩怒て陰搖揮。汝倩君の禄よ扶せられ。形像となり渡通

すはも。掃盗賊といひつゝ。活置とし益なき族徒。一と海小掛投んや。命惜くバ出舡せよと。大音声に罵りけまバ。舡夫輩ます〳〵怖ぢ。今目前に殺されんより。怖ろしくとも出舡するこそ上策なれと。更に活さる意地もなく。櫓を巻揚纜解て。次取〳〵に撞出せぞ。黒田の軍勢五千作騎耳を裂く波の音に。巻来波の首より。尾に打きて乗断相ハさながら高嶺を越るがゝく。将卒偕に。毎々〳〵に匙抄を持。舡を打投を撞出し。象嶽の孤熖を目当として。万発礮中に風波を凌で。漸く洋中へ乗出せしが。内府の幸福や強かりけん。湾御すこし輙ぎけれバ。備こそ後藤を不思議に百神通を得さる者ゝや。風波も弦まる氣色なりと。将卒偕に欽驍ぶ。労衆の寅を軛る頃。屋島の浦に着舡しけり

黒田入潢州先陣吉岡城属渋所落城

天地秋毫も私なし。其使たる風暴くとも。いづくんぞ仁義の人を損ずべけんや。然ぞ黒田ゞ五千作騎。一個も険難なく八潢の南岸に泊船するに。這ゝを歓もなけれど。夜曉て馬を舡より遣濟。法兵を大に労ふなりにを。孝高。後藤ごゝを操て。入りに鞭めぬ汝ゞ料理。感ずるに程剰あり。まづ這國をいづくより。攻取べしとありけるを。基次。褒詞を辞遜して后。然ぞ吉岡り跑るべしとて。六千作人を四檀に新伍し。吉冨の楯り推進る。平も這城ハ連弥として。代〳〵久しく高松氏の主住なり。首将を高松左馬助

後藤基次
暴風雨を謀つて黒田
勢を讃州屋島ふ着岸せしむ

輝則といふ。去れを補護なす勇ありしハ。唐戸孫四郎。堅山志戸守俗。五百餘人ゐて勇壮守り。進軍上陸せし事を。厳浦伸ゐりける中ゐ。陣中の騒動おゐこのたならば。拉ども唐戸。堅山を。些も贖せば射窓賊りし。故進来ぐらハ扼がんと。沫唾を呑で待兎さり。営時ハ四月廿八日。山林ハまゞ朦朧き。卯の一天に黒田の先陣。菅六之助。毋里太兵衛。一子餘藩に面て面門へ向へバ。栗山備中。中務惣兵衛。一子餘人先こと。背門の方へ推進る。後陣ハ大和黒田孝高三子餘藩より後を逼たり。後藤又兵衛基次ハ。遊軍となつて。佐方に指揮なし。四角八面に兵士を賦り。息ども次せば攻寄けるを。城内ゐ。強てより待受けたる事なれば。炮矢を惜まば。無

二無三に。射兎撃兎。或ゐ大木大石ゐて。果煙を発て防ぎける。去れゐより進撃の兵士損毛する輩多しけきハ。後藤又兵衛指揮を加へて。多銃隊伍を先ゐ進ませ。三百挺の炮頭揃へ。正黒ゐなりて撃起こゝ。射窓を閉ざせ其際に。准備乃埋草を壕へ抛込。徳軍一駿に逼進けるゐぞ。陣中射窓を開得ぎ社ゐ。進兵ハ得さりと。遂ゐ隈射撃を撃碎き。菅六之助一番槍と呼ぶて。堞を乗越沈拔バ。毋里太兵衛ハ。面門の回風を去破り。斬起薙伏進ざり。面門を拒抗勇将ハ。堅山志磨ゐなりけるゐ。助と見るより孔憤紋怨し。込拔欲と三四度逃迯すといふといへ。進兵ゐ大軍。陣兵ハ僅五百ゐ足ざれゐ。暁くも大事戦孔して。堅山数ケ所に痛を蒙り孔と決し

たるなり。勇氣も猶く。三間棟の槍を提長に捻綽。敵を万面に擲散らすなり。宛芋茅を苅が如し。進兵も這成は怖きけん。進みねざるを毋利太左衛藤縄目の理は帯沛悲し。駒の馬の鞍揺法し。太刀打振て。堅山に斬て跑る。志摩守意入たりと。闇合出没綱火を散し。勝負果じと拏抒けるが。遂に太左衛は持布このき。刀風腥理小鬼とハなりさり。床を高杠左馬助も。苦。栗山が圍を受。従兵陽を悲く。殺死し血しけれぞ。輝則今ハ社までなりと。太刀を咽は刺貫。廿五年に春秋を左馬助が一敗として。吉岡の城は霞とハなりけり。法り唐戸彈正を背門を拒抗戦ひけるが。軍乱れ。城破きて。拆つぐふもらぬらぎりけるゆゑ。従兵僅は七八騎を。前後小列

行せて一方を斬破り。細川源左衛門高松城と一緒になり。強し て敵を破らんもなと。廿町ばかり落行こと強小。頼を後藤が指揮に固り。基次の腹呂芳村武左衛門。一窩の杜に埋伏しけるが。唐戸彈正這形を。正一門地小行過んと。七八騎まて通蒐るを。芳村が孫の強卒輩。百弓解人が一回は放蒐さる鳥銃り。了得の彈正馬人齊一乱炮はうちに死失けり。大に旅て吉岡城の主従全く戦死しけきバ。城に火と放。凱歌を聲。常日ハ廣野小本陣を居。法士の戦功を軍籍に記し。法太の労を補ひけり。後小深田。扶原。小西侍を。廿九日に浜海して。同じく八鴻小着紅なし。各黒田の陣り弛着。まゞ勝軍の恍びと賀し。次瓜小歓楯を攻陷さんと。黒田

恭び先頭をなし。由良山の陣ゐ向ひけるが。黒田ご進ぬ先にてや。聆畏せしよや落失さり。亦香西伊賀守ハ。傷糸せんとの心底なると。高松城守細川源左衛門元章ぉれらの逗伸を聆と等しく。不意の内破せられおバ。一大事なりと沈吟ゑし。植田乃陣主。長曽我部右兵衛尉と一緒ょならんと。高松の陣と通て。植田の要崖に對凝守り。謀計ともて進係と撃んと。准備厳しく。牢陣す。由良。池田。貪攻ずーる。逃去けるゆゑ。黒田苦もなく。法陣を乗取。然らバ細川ご牢城去ける。植田の陣へ推進んと。黒田。深田。板原。小西。諸勢加合三万餘騎喊を作て推進さり。乎這城の要崖ハ。山高して杉林竹叢四方に圍ゑ。その外地ハ全濕平原なれバ這山上より視る時ハ。千里一點眼を遮ふるごと疑なし。黒田孝高既に陣攻ふ蒐らんずる時。後藤又兵衛忽しく。主人の馬前ょ北来り。額を顰て稟しけるゆゑ。這陣中の曉蹊を察るゑ。なにとをもつて訝しゑ。そ社むこのりかゑ這國の法陣。吉岡の外ハ苦もなく倒失。然して這城に臨むといへどを。嘗たる防禦ぬ相も見えず。塔て細川源左衛門ハ。四國に其名を轟ったる勇将なきば。自方の兵と十分に勾引進。欺謀を構へて撃捉らんと。料理も亦意汗なし。快と欲地の曉蹊を察知。然して后ふ汁議を泛け。改ゑひなバ。勝利れらん。一應通陣ましまにべしと教示けるよそ。孝高も。駿ょ道理ぞと感得して。雲母阪より四五丁北の廣野ふ陣居。軍の評議ふ迫ぞ。

時。小西行長進み出。城攻の役を望まれけるを。深田の家臣長船主殿も這遭黒田に先駈せられ。最朽憾おゆふ様今ゆゑ。小西の役を倖俑として。力を勁せて攻陷さんと。頻に驍起けるゆゑ。黒田も制しがさけれど。深田。小西に望り任せり。後藤基次。恭び主人に勧て曰さく。這遭の合戦。定て自方利を失なん。されを救ふの準備なくんバ。称ふまじと教えけるゆゑ。深田喪家よも指深し。雲母坂の下に伏兵して。補失の備を弟分しける

繪本豐臣勲功記八編卷之七